

風しんの予防対策はだいじょうぶですか？

テレビドラマ「コウノドリ」にも登場して話題となった風しんは、主にせきやくしゃみで風疹ウイルスが飛散し、感染が拡大する病気。妊娠初期の女性がかかるとお腹の赤ちゃんが先天性風しん症候群（難聴や心疾患、白内障、また精神や身体の発達の遅れ等）になるおそれがあります。

かつて風しんは、ほぼ5年ごとに大流行を起こしていましたが、1994年以降、流行と流行の間が長くあくようになり、危機感・警戒感が薄れてきた感もあります。しかし2002年ごろからは各地で局地的な流行が頻発し、2012～13年は全国で16,000人も感染者を出す大流行となりました。その後、患者数は減少したものの、2018年に入ってから再び拡大に転じ、また大流行を迎えています。

「風しん」の症状は……？

- 主な症状は発疹、発熱、リンパ節の腫れ（3つの主な症状）。この症状がない人も多く、感染しても症状が出ない人は約15～30%程度います。通常は自然に治りますが、まれに脳炎など重症化することがあります。
- 症状が出る前後の約1週間は周りの人にうつす可能性があり、ウイルスが感染者の飛まつ（唾液のしぶき）を介して他の人に感染します。

自分や家族、一緒に働く人を風しんから守るために

1

妊娠を希望する女性は、妊娠前に風しんの抗体検査を検討してください。

抗体価が低い場合は、予防接種を検討しましょう。接種後は2カ月間妊娠を避ける必要があります。

2

妊娠中の女性は、家族が風しんの抗体検査を検討してください。

妊婦自身は風疹の予防接種を受けることができません。家族の抗体価が低い場合は、予防接種を検討してもらいましょう。

3

働くみなさんは、体調不良のときは無理をしないで。

どうしても外出が必要な場合には、せきエチケットを徹底しましょう。風しんを疑う症状（発疹、発熱、リンパ節の腫れなど）が出たら、医師に相談しましょう。

厚生労働省「あなたの職場は風しん予防対策をしていますか？」より改変

「風しん予防接種」を受けましょう

近年、風しん患者の多くは働きざかりの成人男性です。2018年の風しん患者は2,000人を超えましたが、3分の2は30～50歳代の男性でした。これは、定期予防接種の制度（図）の関係で40～50歳代の男性はワクチン接種を受けておらず、抗体保有率が80%前後にとどまっているため、同様に30歳代の男性も接種回数が1回だったり接種を受けていなかったり、十分な抗体を持っていない人が少なくないといわれます。

当健保組合では風しんの予防接種に補助を行っていますが、先ごろ厚生労働省も、予防接種の機会のなかった39～56歳（1962年4月2日～1979年4月1日生）の男性を対象に、2019年から21年度末までの約3年間、原則無料でワクチンを接種する方針を発表しました（対象者はまず抗体検査を受け、陰性の場合に接種を受ける）。

● 風疹含有ワクチンの定期予防接種制度と年齢の関係（2019年1月1日時点）

